

大阪・関西万博応援マガジン

EXPOST

Nov.
2023
VOL. 04
TAKE FREEEXPOST [エキスポスト]
EXPO(万博)+POST(新聞)の造語TEAM
EXPO
2025
いどもう、みらいに。
共創チャレンジ

万博は私たちが勝手に盛り上げる



今年7月に大阪・中津で開かれたEXPO酒場には万博の公式キャラクター「ミャクミャク」も駆けつけた (demo!expo 提供)

demo!expo
全国に拡大中

2025年の大阪・関西万博を街から勝手に盛り上げようと、民間のチームが「demo!expo (デモ!エキスポ)」という活動を続けている。万博に興味がある人が集まる交流会を全国で開いたり、関西各地の街を舞台に万博と連動したイベントの開催を企画したり…。多くの人を巻き込んで、誰でも参加できる万博を目指す大きなムーブメントになりつつある。

「日本を変える最後のチャンス」「マイナスのイメージがあったが、そうではないことが分かった」

9月中旬のある夜、お酒を飲みながら万博について語り合うイベントが大阪・本町のカフェで行われた。demo!expoが2022年4月から各地で開いている「EXPO酒場」。この日は会社員や団体職員、建築家ら組織も世代も異なる約30人が参加した。

EXPO酒場は手を挙げた人が「店長」になる1日限定の交流イベントで、誰でも参加できる。当初は関西中心だったが、活動に共鳴した人から「うちでも開きたい」と声がかかり、今では北は青森から南は鹿児島

まで全国で行われるようになった。

今年2月に中小企業の街・大阪府八尾市で開催されたEXPO酒場には会社経営者やアーティストら約120人が参加した。店長の松尾泰貴さんは八尾市役所の産業政策課で働いたり、経済産業省に外向したりした後、市内のインテリア製造・販売会社に転職した経歴を持つ。現在はものづくりの現場を市民に見学・体験してもらうイベントも企画している。

「中小企業経営者も万博に関わりたいと思っているが、方法が分からないし、資金もない。それなら万博に来るお客さんを八尾に呼ばばいい」

そう考える松尾さんらが取り組んでいるのが、町工場とアートをつないで新しい価値を生み出し、八尾を万博の「サテライト会場」にすること。EXPO酒場では参加者から様々なアイデアが出た。

滋賀県湖南市で同じ2月に開かれたEXPO酒場はブラジル料理などのキッチンカーが出店し、サンパチームも登場する国際色豊かな集まりとなった。

湖南市は住民5万4000人の約7%がブラジルなどの外国籍。店長となったデザイナーの柴崎寛子さんは4年前に移住してきたが、日本人と外国人住民の間に見えない「壁」があるのが気になった。その時思い出

したのが2005年に訪れた愛知万博だ。

「たくさんの国の人が集まり、多様な文化やアイデアがそこにある。楽しい空間だった」。そんな万博のような交流の場を目指してEXPO酒場を誘致。昼の12時に始まった酒場は午後8時まで続き、来場者は外国人住民を含め約1100人にのぼった。

EXPO酒場の開催回数は9月末時点で30回、参加者は延べ3000人にのぼる。地域活性化に取り組む市民や自治体、企業、大学の担当者、さらに万博を主催する日本国際博覧会協会の関係者も参加するようになった。交流会をきっかけに、新しいプロジェクトやコラボレーションも次々誕生している。

こんなムーブメントを生み出したdemo!expoとは、誰がいつ始めた、どんな活動なのか。

→8面に続く

INDEX

廃校舎がパビリオンに — 2

万博の達人の楽しみ方 — 4・5

夢洲と淡路島結ぶ点と線 — 6・7

廃校舎に新たないのち吹き込む 河瀬直美監督プロデュースのテーマ館



旧折立中学校舎の前で安全祈願祭に臨む河瀬監督=右端=ら（読売新聞社提供）。写真下は「いのちのあかし」の完成イメージ

大阪・関西万博のテーマ事業プロデューサーで映画監督の河瀬直美さんが手がけるシグネチャーパビリオン「いのちのあかし」に、廃校となった中学校と小学校の木造校舎が移築・活用されることになった。河瀬さんは「2つの校舎は時代を超えて人々に共有されてきた記憶が宿る美しいたたずまいの建物。校舎を活用し、新しいいのちを吹き込みたい」としている。

奈良県最南端にある十津川村。7月2日、移築される廃校舎の一つ、旧村立折立中学校で工事の安全祈願祭が開かれ、河瀬さんら関係者が参列した。

2012年に閉校となった旧折立中学校には、1952(昭和27)年に建てられた南棟(延べ床面積970平方メートル)と65年に別の場所から移築された北棟(943平方メートル)の2つの木造2階建て建物が並んで立っている。焼杉の外壁は建築当時から、ほぼ手つかずのまま残っているという。

世界中の人々と対話

シグネチャーパビリオンは、河瀬さんやメディアアーティストの落合陽一さん、放送作家の小山薫堂さんら8人のプロデューサーが、万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」をそれぞれの観点から解釈・展開し、未来の人々につなぐ展示施設。いわば万博のテーマ館で、会場中央部に8つのパビリオンが配置される。

河瀬さんのパビリオン(1500平方メートル)には「対話シアター」と「森の集会所」が設けられる。シアターは初めて出会う世界中の人とスクリーン越しに対話ができ、人種や宗教、文化の違いなどを乗り越える場を目指している。集会所では木々に囲まれながらシアターで生まれた対話の記録を見ることができる。

河瀬さんは、このパビリオンに廃校舎を活用することを思い立ち、自身が生まれ育った奈良県内を中心に候補を探して回った。旧折立中学校の校舎は「初めて訪れたにもかかわらず、昔からここを知っていたかのような懐かしさを感じさせてくれた」といい、即決で採用を決めた。

もう一つの廃校舎は、京都府福知山市にある旧市立細見小学校中出分校。100年近く前の1930(昭和5)年に建設された木造平屋建て建物(362平方メートル)で、2002年に閉校になった。

福知山市は、少子化で統廃合を行った小学校の校舎を民間の力で活用し、地域ににぎわいを取り戻す事業を進めており、16校あった廃校舎の半数以上が新たな施設として再スタートを切っている。こうした市の姿勢も評価されたという。

いずれも解体後、大阪湾の人工島、夢洲の万博会場に運ばれ、旧折立中学校の南棟が「いのちのあかし」のエントランス、旧細見小学校中出分校が「対話シ

アター」、旧折立中学校の北棟が「森の集会所」となる。河瀬さんは廃校舎について「(地元の人が)これまで大切にしてくれ



©2023 Naomi Kawase/SUO, All Rights Reserved.

パナソニックはリサイクル材活用

パナソニックグループのパビリオン「ノモの国」は、使用済み家電製品などから回収したリサイクル材料を柱などの建築部材として活用することになっている。

同グループは2013年から製鉄会社と共同で、家電リサイクル工場から回収した鉄スクラップを再び製品の材料として使う資源循環の取り組みを行っている。万博のパビリオンでは柱や梁などの大半に、このリサイクル鉄を用いる。パビリオンの外構部にはドラム式洗濯乾燥機のリサイクルガラ

スで製造した舗装ブロック、幹線ケーブルにもリサイクル銅線を使用する。万博終了後は建築に使った材料を循環サイクルに戻し、「日本国際博覧会協会が目標とする98.1%(重量ベース)のリサイクル率を目指したい」としている。

「ノモの国」のコンセプトは、「解き放て。ここらとからだごとじぶんとせかい」。子供たちが非日常的な冒険を通じて自分の可能性に気付いてもらうパビリオンになる。7月12日に起工式が行われた。

循環社会体験できるパビリオンに 日本館の起工式行われる

大阪・関西万博に日本政府が出席するパビリオン「日本館」の起工式が9月11日、夢洲で行われた。ホスト国として万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」をアピールする中核的な施設となる。

日本館は木材が重なった3階建ての特徴的なデザインで、延べ面積1万1300平方メートル。来場者に日本の循環型社会などを体験してもらうほか、各国要人をもてなす場所としても利用されるという。

総合プロデューサーを務めるデザイナー

の佐藤オオキさんは、起工式で「ありとあらゆるものや命は何か役目を終えても次の役目につながり、それが連鎖することで大きな循環が生まれることを体感できるパビリオンにしたい」とあいさつした。

日本館の建設工事をめぐっては当初の予定価格内で応札がなく、開幕に間に合わせるため、任意に業者を選ばず任意契約に切り替えた経緯がある。着工は当初計画より約3カ月ずれ込んだが、予定通り2025年2月末の完成を目指している。



木材が重なった3階建てのデザインの日本館(経済産業省提供)

ハルカスと梅田大丸に公式ストア ミyakumiyakuが「1日店長」に

大阪・関西万博の公式ライセンス商品

を販売するオフィシャルストアが、あべのハルカス近鉄本店(大阪市阿倍野区)と大丸梅田店(大阪市北区)にオープンした。

あべのハルカス店は売り場面積42平方メートル。万博のシンボルカラーの赤と青に彩られた空間に、万博の公式キャラクター「ミyakumiyaku」のぬいぐるみやTシャツ、キーホルダーなどの商品が並んでいる。

開店日の9月6日にはミyakumiyakuが「1日店長」に就任し、吉村洋文・大阪府知

事らとともにテープカットを行った。

大丸梅田店は9月27日にオープン。宝塚歌劇団とコラボレーションし、男役と娘役をイメージしたミyakumiyakuを描いたバスケースなどの販売も同日から始まった。

オフィシャルストアは、日本国際博覧会協会などが情報発信の場として開設。石毛博行事務総長は「お客様に買って、見て、楽しんでいただき、一緒に万博を盛り上げていきたい」としており、万博協会は今後、全国に店舗を拡大する方針だ。



大丸梅田店のオープン日に「1日店長」を務めたミyakumiyaku(2025大阪・関西万博マスターライセンスオフィス提供)

コンセプトは「化ける、未来!」 天候などで表情変えるガスパビリオン

都市ガス事業者でつくる日本ガス協会は9月22日、大阪・関西万博に出展する「ガスパビリオン」の起工式を行った。「化ける、未来!」をコンセプトに、お化けの不思議な世界で子供たちに未来のエネルギー問題などを考えるきっかけをつかんでもらう体験型施設になる。

「カーボンニュートラルな火」をイメージした三角形の膜構造の建物で、外膜に大阪ガスが開発した放射冷却素材を使い、冷房などに必要なエネルギーを抑える。周

囲の風景が鏡面の膜に映り込み、夜は青白くライトアップされる。

コンセプトには、2050年のカーボンニュートラル実現に向け一人一人が意識や行動を大きく変える(化ける)ことで、希望に満ちた社会や世界に変わっていく(化ける)という思いを込めている。建物も天候や時間帯、見る位置によって表情が変わる(化ける)という。

同協会は1970年の大阪万博で「笑いの世界」をテーマに出展している。



天候や時間帯によって表情が変わるガスパビリオンのイメージ図(日本ガス協会提供)

チェコなど4か国に海外勢初の建築許可

チェコ、モナコ、ベルギー、ルクセンブルクの4か国が10月20日までに、大阪・関西万博のパビリオン建設に必要な「仮設建築物許可」を大阪市から取得した。建設の遅れが心配されている海外パビリオンでは初めてとなる。このうちチェコのパビリオンはガラスのらせん構造という建物で、来春に着工し、完成は万博開幕1カ月前の2025年3月になるという。

海外パビリオンには、参加国が独自に建物を設計・建

設する「タイプA」、日本側が建てて内装は各国が手がける「タイプB」、日本側が建設し複数の国で共同使用する「タイプC」の3種類ある。参加表明した約150か国・地域のうち56か国・地域がタイプAを希望しているが、建設業者との契約にこぎつけたのは同日段階で約3分の1の20か国にとどまっている。資材高騰や人手不足で業者との契約が難航しているとされるが、開幕に間に合わない恐れも指摘されている。

■ミyakumiyakuのラッピング列車

JR西日本は日本国際博覧会協会と広報・プロモーション協賛契約を締結し、開催500日前の11月30日から「ミyakumiyaku」などのデザインをラッピングした列車1編成を大阪環状線とJRゆめ咲線で運行する。日本航空も28日から特別塗装した「JAL ミyakumiyaku JET」を伊丹空港を拠点とする国内線で運航する。

■マルビル跡地に万博バスターミナル

日本国際博覧会協会は、JR大阪駅前の複合ビル「大阪マルビル」跡地を万博シャトルバスのターミナルとして利用するため、所有者の大和ハウス工業と協賛契約を結んだ。同社がターミナルを整備し、協会に無償で貸与するという。

■中之島で「万博の展覧会」

万博の魅力を伝える「博覧会の展覧会」が11月25日～12月25日に大阪市北区の府立中之島図書館で行われる。今年で4回目。大阪・関西万博の最新情報を紹介するほか、1970年大阪万博のグッズなども展示。セミナーも開催される。入場無料。問い合わせは同図書館(電話06・6203・0474)。

■「万博に行ってみたい」は半数

産経新聞グループの調査会社、産経リサーチ&データが5月にネットで実施した大阪・関西万博についてのアンケート(回答者2424人)によると、万博に「ぜひ行ってみたい」と答えた人が21.4%、「できれば行ってみたい」が32.3%と、あわせても半数にとどまった。地域別では開催地の大阪で7割以上、大阪を除く近畿でも6割以上が「行ってみたい」としたのに対し、北海道・東北、関東、九州・沖縄は同回答が半数以下だった。

■夢洲の建設風景をライブ配信

大阪・関西万博の建設工事の様子をリアルタイムで見ることができるライブ配信が始まった。会場から約4キロ離れた大阪・南港のアジア太平洋トレードセンター(ATC)の11階にカメラを設置。「ワクワクEXPO広場」のサイト(QRコード)から見ることができる。



このため、日本国際博覧会協会は建物のデザインを簡素化したうえで日本側が建設を代行する「タイプX」方式への移行を提案していた。ただ、同方式はデザインの自由度が狭まるため、採用する方針を決めたのはこれまでにアンゴラ1か国だけとされている。

米国のジェイソン・クーパー駐大阪・神戸総領事は10月12日に行った記者会見で米館について「(タイプAを)変える計画はない」と明言。着工は来春になるが、「開幕までに確実に完成させる」と語った。

一方、海外パビリオンとは対照的に、民間パビリオンなど国内勢は順調に建設作業が進んでいる。

緑のスタイルで万博の「有名人」に

大阪在住の達人・グリーンマンさん

2021年から22年にかけてUAE（アラブ首長国連合）で開かれたドバイ万博で、各国のパビリオンのスタッフらから「グリーンマン」と親しみを込めて呼ばれた男性（42）が大阪にいる。帽子からサングラス、ネクタイ、ベスト、ズボン、靴まで緑色で統一しているのが、その名の由来だ。このスタイルで2010年の上海からドバイまで5回の万博に長期間訪れ、親しくなったスタッフは数十人にのぼる。万博開催中は、そんな知り合いにスタッフ用宿舎に泊めてもらったり、一般の観客は入れないエリアに案内してもらったりしているという。達人・グリーンマンさん流の万博の楽しみ方とはー。

「カザフで見かけたよ」

ドバイ万博開催中の一昨年暮れ、万博会場を出たグリーンマンさんは男性警官に呼び止められた。「あれ、何かしたかな?」。一瞬不安になったが、笑顔浮かべながら近づいてきた警官は「ユーをカザフスタンで見かけたよ。ドバイまで来てくれたのか」と、スマホの画面の写真を見せた。そこには、グリーンマンさんと中東の民族衣装を着た男性が写っていた。

警官は、その4年前に中央アジアのカザフスタンで開かれたアスタナ万博でUAE館のスタッフをしていた男性で、写真はパビリオンの前でグリーンマンさんと一緒に記念撮影した一枚だった。男性はその後、帰国し、ドバイ万博では警備の仕事についたのだという。

ドバイでは、トルクメニスタン館のスタッフからも「以前開かれた万博で見たよ」とグリーンマンさんは声をかけられた。

これほど万博関係者の中で有名になったグリーンマンさんだが、昔は万博にそれほど関心はなかったという。大学を卒業後、介護士の仕事や家業の手伝いをしてきたグリーンマンさんは2010年5月、初めて海外旅行をすることになった。その時、行き先としてたまたま選んだのが万博を開催中の上海だった。だが、会場を訪れたその日のうちに万博のとりこになった。

「すごいパビリオンが立ち並び、世界から集まってきた人たちがいる。世の中にはこんな楽しいイベントがあったんや」

「万博をもっと見たい」と思ったが、2泊3日の予定だったため、2カ月後、再び休みを取って上海を訪れた。全身緑色のスタイルをしたのは、この時からだ。普通の格好で行った最初の訪問時、あるパビリオンでスタッフと仲良くなったが、翌日、再び入館すると相手は覚えてくれておらず、残念な思いをした。「やっぱり目立たないと…」そう考え、緑色のTシャツを持っていたことから、ひらめいたスタイルだった。

● 万博の種類

万博は「国際博覧会条約」に基づいて開かれる博覧会。5年ごとに開催され、開催期間最大6カ月の登録博覧会と、登録博の間に開かれ、開催期間最大3カ月の認定博覧会の2種類ある。グリーンマンさんが訪れた上海、ミラノ、ドバイは登録博、麗水、アスタナは認定博だった。2025年の大阪・関西万博は登録博だ。

1週間の滞在中、気に入ったパビリオンに「また来ました」と毎日訪れると、さすがにスタッフに顔を覚えてもらうことができた。その後、12年の韓国・麗水（よす）万博、15年のイタリア・ミラノ万博、17年のアスタナ万博、そしてドバイ万博を訪れたグリーンマンさんは、いつもこのスタイルを通し、スタッフらの間でちょっとした有名人になった。

スタッフとの再会が楽しみに

パビリオンのスタッフは次の万博でも働いていることが多い。グリーンマンさんにとって、顔なじみになった人と再会できるのが万博での最大の楽しみになった。

麗水万博で知り合ったスイス館のスタッフ、ゼノさんとは3年後のミラノで再会。50日間ほどの滞在期間中、スタッフ用宿舎のEXPOビレッジにずっと泊めてもらったり、スイス館の入場パスをもらったりした。ドバイでもミラノ万博で働いていたポルトガル館のソラヤさん、Bangladesh館館長のマーティンさんらと再会。今年6月にはドバイで知り合ったルーマニアの万博ファンが大阪を訪ねてきた。

ドバイ万博には仕事をやめて計4回訪れ、延べ70日間ほど滞在した。パビリオン巡りの合間には、ルーマニア館でスタッフの誕生パーティーに参加したり、アイルランド館のライブショーに招待してもらったり、カタール館の館長にランチをごちそうしてもらったり…。2回目の訪問時には、その直前にロシアによるウクライナ侵攻があり、各国のパビリオンがウクライナを応援するため同国の国旗を掲げるなど会場の雰囲気が変わっているのに驚いたという。

閉幕日の3月31日。グリーンマンさんはオーストラリア館の館長からパビリオンの閉館式に招待された。実はグリーンマンさんは閉館日も同館に一番乗りしており、司会者から「オーストラリアをこよなく愛する日本人」と紹介された。ステージに上がった



グリーンマンさんがドバイ万博で撮影した写真。インスタグラムなどに投稿している（本人提供）

たグリーンマンさんは館長から記念品としてパビリオンのロゴマークを渡された。

「このロゴは大阪・関西万博まで預かっておきます。3年後、大阪で会いましょう」。グリーンマンさんがそうあいさつすると、会場から割れんばかりの拍手が起きた。

マイスタンプと寿司パーティー

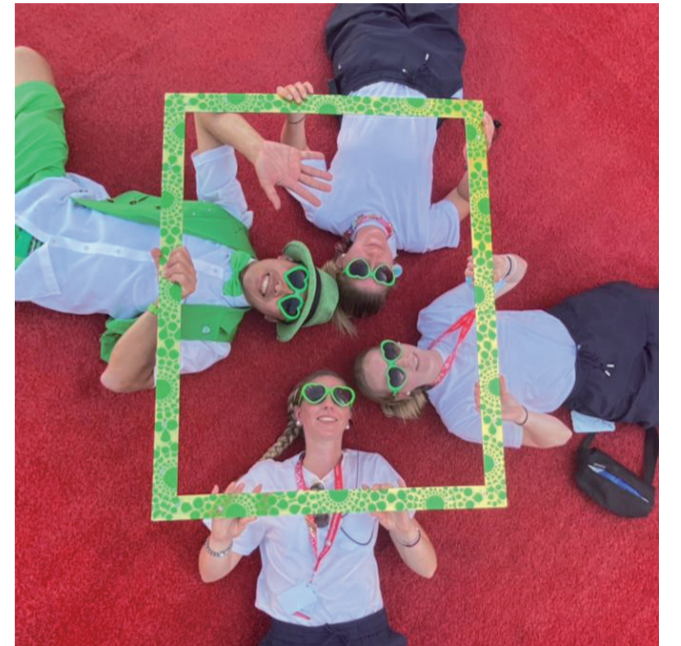
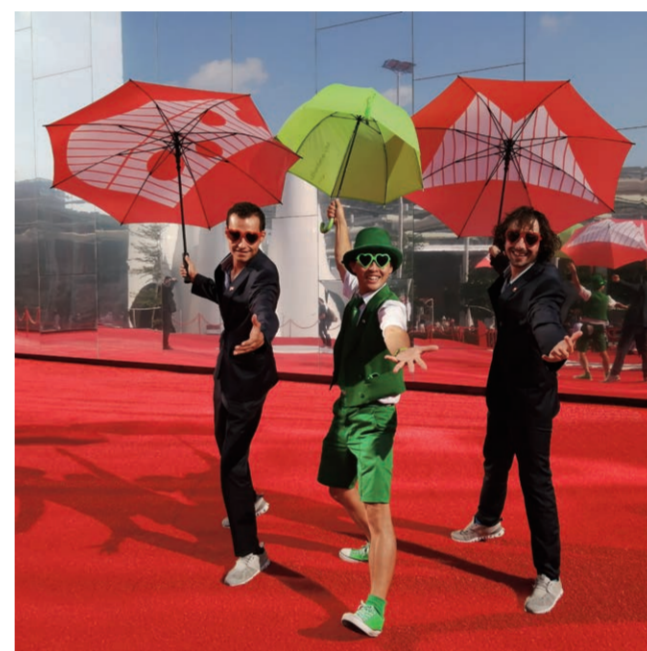
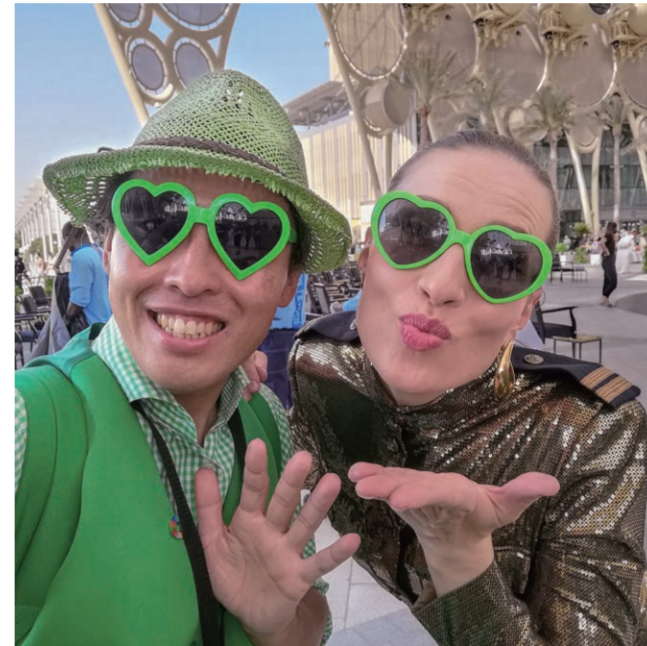
海外の人と交流するには外国語、とくに英語をしゃべれることが必要だ。しかし、グリーンマンさんは「言葉はダメなんです」と笑う。麗水万博のあと、ワーキングホリデーで1年間、オーストラリアに滞在したが、周囲にいるのは日本人ばかり。寿司屋で働いたこともあり、英語はあまり上達しなかった。ただ、自分がやりたいことを英語や現地語でどう表現するかを、日本を出発する前に調べ、あとは知っている単語を並べると、意外と意思は通じるという。

グリーンマンさんには万博での独自の「楽しみ方」がある。それが言葉以上に、

外国の人たちとコミュニケーションを深めるのに役立つツールとなっている。

その一つがスタンプだ。万博ではパビリオンで入場記念スタンプをスタンプ帳に押ししてもらうのが人気だが、グリーンマンさんは非常口のビクトグラム（絵文字）をアレンジした「マイスタンプ」を持っている。ドバイでは香港からの観客にスタンプを押してあげたところ、その人が交流サイト（SNS）で発信し、会場のあちこちで「自分にも押しして」と頼まれるようになった。ホテルでグリーンマンさんの帰りを待っている人まで現れたという。

もう一つは寿司パーティー。海苔やお酢を日本から持参、オーストラリアの寿司屋で覚えた腕を生かし、現地で調達した食材を使って巻き寿司を握り、パビリオンのゲストルームやEXPOビレッジでスタッフたちと寿司パーティーを楽しむのだという。「食」がテーマとなったミラノ万博では、その回数は10数回にのぼった。



グリーンマンさんには実は「Folletto Pistacchio」という万博での活動名がある。イタリア語で「ピスタチオの妖精」という意味で、SNSで使っている。

Instagram



楽天ブログ



最大ツールは今の時代らしく写真投稿サイトの「Instagram」だ。グリーンマンさんは小道具を使って、いわゆる「映える写真」を投稿している。ドバイ万博には緑色のアルミ製フレームを持参した。ドバイには「ドバイフレーム」という高さ150メートルの巨大な額縁のような名所の建物があり、それをイメージしたものだ。こうした小道具を持っていると「一緒に写真を撮って」と頼まれることがよくあるという。ドバイでは記念撮影に応じてあげた女性グループが実は大会関係者で、一般の観客は入れない閉会式の入場パスをお礼にもらったこともある。

2年後、大阪で恩返し

そんな万博が2年後、大阪で開催され

る。実はグリーンマンさんは会場のすぐ近くに住んでおり、「今までお世話になった人たちに恩返しをしたい」という。

グリーンマンさんがドバイ万博などに長期間滞在できたのは一人暮らしの身軽さがあったためだ。ピンバッジを交換するため、万博に自分のバッジを持って行く人は

時々いるが、個人でマイスタンプを持っているのはグリーンマンさんぐらいだろう。

そういう意味ではグリーンマンさんは特別だろう。ただ、万博にはパビリオン巡り以外にも、いろいろな楽しみ方があることをグリーンマンさんは教えてくれる。大阪・関西万博でも参考になりそうだ。

「EXPOST」パートナー募集

「EXPOST」（エキスポスト）は、大阪に本社を置くサンケイ総合印刷、真生印刷、デジタル総合印刷とIT企業LAB.ASの4社が大阪・関西万博の機運醸成に貢献しようとして昨年発行しているフリーペーパーです。この活動を拡大するのを手伝っていただけるパートナーを募集しています。発行回数は年2回で、今回で4号目と

なります。約1万部発行し、「大阪・関西万博 開催支援EXPO」のような万博関連イベントの会場配布したり、図書館などの公共施設に置いていただいたりしています。日本国際博覧会協会の参加型プログラム「共創チャレンジ」にも登録されています。

一人でも多くの人に読んでもらうため、

今回は配布場所を拡大するとともに、発行回数も増加。万博終了まで「EXPOST」の発行を続けたいと考えています。

ただ、われわれ4社だけではできないことに限度があります。このため、新聞の配布や取材・編集でパートナーになっていただけの団体や企業を探しています。

関心のある方は下記アドレスまでメールでご連絡ください。万博関連ニュースの情報提供もお待ちしています。

expost@sankei-sp.co.jp



紀之定正一さん

総合人材サービス大手のパソナグループが、創業の地である関西で2つのプロジェクトを進めている。大阪・関西万博へのパビリオン出展と淡路島（兵庫県）への本社機能の一部移転だ。この2つを結ぶ点と線とは－。伊藤真人常務執行役員に聞いた。

（聞き手は真生印刷常務取締役、紀之定正一さん）

紀之定正一さん 9月7日に夢洲でパビリオンの地鎮祭を行われました。

伊藤真人さん 地鎮祭では淡路島にある伊弉諾（いざなぎ）神宮の宮司さんに安全祈願をしていただき、巫女さんの神楽を奉納してもらいました。伊弉諾神宮は国生み神話の神社。日本で一番古い神社といわれます。出席したゼネコンの方も「こんな地鎮祭は初めてです」と驚いていました。

紀之定さん パビリオンのコンセプトは「いのち、ありがとう。」ですね。

伊藤さん 自然が私たちに与えてくれる豊かな恵みに感謝し、今生きていることに

「ありがとう」と言い合える。そんな世界をつくり、次の世代に残したいという思いが込められています。パビリオンはアンモナイトのようならせん構造となりますが、それには2つの意味があります。1つは約4億年前に登場し、3回の大量絶滅期を生き延びたアンモナイトは「いのちの大先輩」といえる存在であること。さらに自然界には宇宙の星雲から人間のDNAまで様々ならせん構造のものがあつちます。つまり、らせんは「いのちの象徴」ともいえるからです。展示では、生命の誕生から現在までのいのちをつないできた心臓にスポットを当てます。



建築家の板坂論さんがデザインしたパビリオンの予想図。アンモナイト型の建物だ（パソナグループ提供）

紀之定正一

真生印刷常務取締役

真に豊かな社会を

Profile

紀之定正一 1983年、真生印刷に入社。現在、同社常務取締役兼LAB.AS取締役。地域・未来コーディネーターとして堺市を中心に大阪・泉州地域で地域貢献活動にかかわっている。大阪・関西万博の参加型プログラム「共創チャレンジ」にも取り組んでいる。

万博と淡路島から

伊藤真人

パソナグループ常務執行役員

Profile

伊藤真人 1994年、パソナ入社。2015年から京都府京丹後市にある道の駅・丹後王国「食のみやこ」の再生事業にかかわった後、18年から常務執行役員Regional Advantage兼Natureverse本部長。持続発展可能な地方創生事業の推進に取り組んでいる。大阪・関西万博のパソナグループパビリオンを担当。



伊藤真人さん

いのある人など、年齢や性別を問わずに誰もが好きな仕事を選択して社会で活躍できる機会を創造してきました。2000年以降は地方創生や地域活性化、さらに農業人材の育成に取り組むようになりました。最近は、あらゆる人が生き活きと働き、幸せに暮らすことのできる真に豊かな社会である「ミューチュアル・ソサエティ」の実現を目指しています。そんな時、南部が知り合ったのが澤先生です。先生は「難しい手術をしても、一方で貧困や戦争で多くの人が亡くなっており、医療の限界を感じている。命のあり方を考えてみたい」とおっしゃいました。アプローチは違いますが、思いは一緒です。これが再生医療をテーマに万博に出展するきっかけになりました。

紀之定さん 万博が開催される2025年度は創業50周年。阪神・淡路大震災から30年目にもあたります。パソナグループは被災地の復興支援に取り組まれましたが、そのあたりも意識されたのですか。

伊藤さん そのことは後から気がつきました。震災当時、私は入社1年目で、自身が被災者でした。震災は当社にとってもターニングポイントになったと思います。5年間で5万人の雇用を創出することを目標に復興プロジェクトを始めましたが、被災者に働いてもらう仕事自体がなくなったため、自分たちで仕事を創出しなければなりません。それが淡路島などでの地域創生事業につながっていると思います。

紀之定さん コロナ禍の2020年、本社機能の一部を東京から淡路島に移転する

と発表されたとき、世間は驚きました。

伊藤さん われわれが淡路島で地域創生事業を始めたのは2008年ですが、そのころから南部は「いつか淡路島に本社機能を移したい」と言い続けていました。淡路島はポテンシャルの高い地域です。大阪や神戸からアクセスしやすく、空港も徳島空港を含めると4つあります。気候が温暖で、農業や漁業、畜産業など食べるものに恵まれており、これまでにホテルやレストランなど19か所の施設を展開してきました。その後、コロナ禍でリモートワークが当たり前になるなど働き方が大きく変わり、本社機能の一部移転を決断したわけです。

紀之定さん 現時点でどれくらいの社員

が東京から移ってきたのですか。

伊藤さん 2023年5月末時点で、目標の9割近い1050人が淡路島で働いています。私は実家のある神戸から通っていますが、大半の社員は島内に住んでいます。中には環境の良さを気に入って3世代で移り住んだ人もいます。最初は社員と地域のつながりが薄く、「よく分からない会社に来た」とみている地元の人もいたと思いますが、本社機能の移転でようやく本気だと理解していただいたと思います。

紀之定さん 万博のパビリオンは閉幕後、淡路島に移築されるそうですね。

伊藤さん 具体的な活用法は未定ですが、万博のレガシーとして未来の医療を展

示する施設にするとか、オフィスにするとか、いろいろなアイデアが出ています。

紀之定さん 万博をきっかけに今後は医療分野にも進出されるのですか。

伊藤さん 淡路島も住民の高齢化が進んでおり、65歳以上の高齢化率が40%弱に達します。これは日本の平均より高く、2050年ごろの日本社会を先取りしているといわれます。そこでわれわれが今、澤先生と一緒に提案しているのが「活躍寿命」。つまり働いたりボランティアをしたりして社会で活躍できる寿命を伸ばすことです。地域の自治体には「淡路島を活躍寿命が日本一長い地域にしましょう」と言っています。そのためには病気になる前の未病の段階

から対策することが必要です。例えば、最新のデバイスを使って多くの人に体のデータを提供してもらい、それを解析して薬の開発や健康指導に役立てることを検討しています。「人を活かす」ということでは、これまでと変わりはありません。

紀之定さん 活躍寿命を伸ばしてこそ、人は生きていくと実感できる。万博のレガシーが淡路島で生かされそうです。

伊藤さん われわれのパビリオンは万博会場の西側、大阪湾に近い場所に建てられます。天気が晴れていると、そこから淡路島がくっきり見えるんです。地鎮祭の時にそれに気づいたのですが、縁のようなものを感じ、決意を新たにしましたね。

30日から前売り券販売 最大3500円安く

大阪・関西万博の前売り入場券が、開幕500日前の11月30日から販売される。入場できる時期によって料金が異なり、18歳以上の大人の場合、会期中（2025年4月13日～10月13日）に発売される「一日券」（基本料金）の7500円と比べると最大3500円安くなる。

基本料金は大人（18歳以上）7500円、中人（12～17歳）4200円、小人（4～11歳）1800円で、3歳以下は無料となっている。これに対して前売り券は、会期中いつでも入場できる一日券が大人6000円（24年10月7日以降は6700円）、開幕日～4月26日に入場できる「開幕券」が同4000円、開幕日～7月18日の「前期券」が同5000円。中人は最大2000円、小人も800円安くなる。

大人2人と小学生の子供2人の家族で来場する場合、基本料金なら1万8600円かかるが、前売りの一日券を買っておけばいつでも1万5000円で済む計算だ。何度でも入場できるパスも前売りから販売される。いつでも入場できる「通期パス」が大人3万円、7月19日～8月31日の「夏パス」が同1万2000円。ただしパスの場合、入場時間は午前11時以降になる。会期中も午後5時以降入場の「夜間券」（同3700円）が発売される。

入場券は電子チケットで、協会の公式販売サイトなどからスマホやパソコンで購入できる。来場予定日の半年前から来場日時を指定する必要がある。

日本国際博覧会協会は当初、大人6000円を軸に基本料金を検討していたが、その後、資材価格の高騰や警備強化への対応から運営費が上振れする見通しとなり、値上げを余儀なくされた。ただ、7500円という入場料は、2005年の愛知万博（4600円）、21～22年のバイ万博（約3000

円）を大幅に上回る。万博協会では、目標来場者約2820万人の半数以上を前売り券で確保したい考えだ。また、開幕券や前期券の販売で、会期後半に集中しがちな来場者の分散を図ることになった。

大阪・関西万博のチケット

券種	入場期間	料金(税込み)			
		18歳以上	12～17歳	4～11歳	
前売り	開幕券	開幕日～4月26日	4000円	2200円	1000円
	前期券	開幕日～7月18日	5000円	3000円	1200円
	一日券*	会期中いつでも	6000円	3500円	1500円
会期中	一日券	会期中いつでも	7500円	4200円	1800円
	平日券	会期中の平日	6000円	3500円	1500円
	夏パス	7月19日～8月31日	12000円	7000円	3000円
パス	通期パス	会期中いつでも	30000円	17000円	7000円

*前売り一日券の料金は2024年10月7日以降、値上げされる

誰でも参加できる万博を目指す

組織や世代超え、新しいプロジェクトも続々

→1面から続く

「万博に関心があっても関わるのは難しいと思っている人は多い。では一番ハードルが低い参加方法は何か? お酒を飲みながら話することだと気づいたわけです」

EXPO酒場を始めた理由をそう語るのはdemo!expoの仕掛け人・花岡さんだ。

大阪市西区でデザイン会社を営む花岡さんが仲間と活動を始めたのは大阪・関西万博が決定する前の2018年にさかのぼる。「面白くて変なことを考えている」をモットーにネット広告やPRイベントの企画・制作を行っている花岡さんには、誘致に向けた行政の機運醸成活動は「下手すぎる」と感じたため、当時はフリーペーパーを発行したり、勉強会を開いたりした。

同年、大阪開催が決まり、21年9月に「誰でも万博に参加できる」新たな仕組みとしてdemo!expoを立ち上げた。demoには「別に呼ばれてないけど、でも、やろう」という意味合いが込められているという。

その後、EXPO酒場などをスタートさせると、万博を盛り上げたいという思いに共感した様々な人たちが集まってきた。

今村治世さんは三菱総合研究所の主任研究員。日本国際博覧会協会が万博の参加型プログラム「TEAM EXPO 2025」の設計にも携わった。岡本栄理さんはオフィス家具メーカー、オカムラの社員で、万博協会が主催するトークイベントにかかわっていたことから花岡さんに声をかけられた。

今年4月には今村さんや岡本さんらも参加してdemo!expoは一般社団法人化され、活動がさらに拡大することになった。

岡本さんは「まったく異なる分野の人たちが万博を共通点に集まってきた。万博という言葉には魔法の力がある」と話す。

こうした交流から生まれたプロジェクトの一つが、万博に向けて新しい大阪みやげを作る計画。明治20年創業の和菓子店・高山堂の竹本洋平さんが声をかけた。和洋菓子メーカー9店舗と高校1校が参加し、第一弾として「パビリオン」という商品名でカラフルなデザインのキューブ型ようかんを



走行中の電車の車内でドラム演奏などが披露された「EXPO TRAIN 近鉄号」(demo!expo提供)

開発。5月に大阪・梅田の百貨店で発売したところ、1週間で1万5000個売れた。

7月に行われた「EXPO TRAIN 近鉄号」は近鉄グループの広告代理店、アド近鉄の長尾あみりさんが「近鉄沿線で万博を盛り上げたい」と働きかけて実現したイベントだ。近鉄の観光列車を借り切り、大阪～奈良間を3時間かけて往復。車内でドラム演奏や紙芝居、ワークショップが行われたほか、沿線で作られたビールや清涼飲料水が発売され、家族連れらが楽しんだ。

「まちごと万博」は地域活性化などに取り組む人たちと連携し、万博の開幕前や会期中に大阪など関西各地の街を舞台に様々なイベントを開くプロジェクト。夢洲会場と街の垣根をなくし市民参加のハードルを下げる試みで、今年4月から5月にかけて8か所で開幕2年前のイベントを開いた。

今、準備を進めているのが「夜のパビリオン」構想。飲食店やライブハウスと一緒

に内外から万博を訪れる観光客に「夜の大阪の魅力」をアピールするプロジェクトだ。大阪のホテルマンたちが街に出てインバウンドに観光案内や通訳のボランティアをする計画もある。大阪文化ともいえる「お節介」を観光資源化してしまうのが狙いだ。

「今宮戎神社の十日戎は屋台が出ていないと物足りない。万博に置き換えると夢洲の会場は境内で、周辺の街が屋台にあたります。祭りである万博が終わっても屋台である街はなくなりません」と花岡さん。「ま

ちごと万博」や「夜のパビリオン」には、一過性のイベントではなく、何年も効果が持続する万博にしたいとの思いもある。

海外パビリオン建設の遅れなど後ろ向きのニュースが目立つ万博。しかし、花岡さんはそれほど気にしていないという。

「心配なのは、なんとなく終わって何も残らない万博になること。でも、こういう活躍を続けていたら、何か面白いことができると思います。少なくとも万博でつながった人々のネットワークは残ります」

30日に難波で万博カーニバル

demo!expoが活動を報告する「まちごと万博カーニバル in OSAKA」が万博開幕500日前の11月30日、大阪・難波のなんばパークス1階なんばカーニバルモールなどで開かれる。夜にはEXPO酒場も行われ、約1000人の来場を見込んでいる。

大阪商工会議所や南海電鉄との共催で、会場内に設けたステージやブースで各プロジェクトが活動を報告。「まちごと万博」の新しいプロジェクトも発表される。

入場は自由。カーニバルは午後3時から、EXPO酒場は午後6時半から。

サンケイ総合印刷株式会社

●本社:大阪市此花区西九条2-14-6
●電話:06-6462-1951
●設立:1961年



真生印刷株式会社

●本社:堺市堺区神南辺町5丁152-2
●電話:072-225-5001
●設立:1953年



デジタル総合印刷株式会社

●本社:大阪市東住吉区杭全2-10-1
●電話:06-7178-5151
●設立:1952年



株式会社LAB.AS

●本社:大阪市此花区西九条2-14-6
●設立:2021年

